追　悼　　小泉保先生
Obituary　TAMOTSU KOIZUMI

小泉保先生のご逝去を悼む

（ご葬儀の折に捧げられた「弔辞」）

松本克己

元日本言語学会会長小泉保先生は，年の瀬も迫る 12 月 18 日，忽然としてこの世を去られました。奥様からのその訃報に接したとき，私は余りの驚きにほとんど言葉を失いました。

先生は，長年在職された関西外国語大学を退かれてからのここ数年，次々と大きな著作を世に問われ，その目覚ましい活躍ぶりには，年齢の衰えなど少しも感じられませんでした。今の仕事から今度はどのような著書が生み出されるのだろうかと，私どもはひたすらそれを待ち望んでいたのです。しかし，今となってはそれも叶わぬ夢と消えました。誠に痛恨の極みです。

振り返れば，戦後間もない東京大学で，私は先生の一年後輩として同じ言語学研究室で席を並べて以来，先生とは半世紀を超える長いお付き合いになります。しかし私がとりわけ先生と近しく接したのは，昭和の終わりから平成の時代，つまり 1980 年代から 90 年代にかけた 10 年余り，主として日本言語学会での仕事を通じてでした。具体的には，機関誌『言語研究』の編集委員長，続いて会長の職務を先生と相前後して受け持った時期です。当時私が在籍した筑波大学で，能格性をテーマに言語学会としては初めてシンポジウムという形の公開討論会が企画され，その成果が当時先生が編集委員長をされていた『言語研究』に掲載されたことも，今となっては懐かしい想い出です。

また，昭和の末から平成の始めにかけて，日本言語学会の創立 50 周年と日本言語学会第 100 回大会という 2 つの記念すべき事業が，神戸と東京で相次いで執り行われましたが，これも先生の会長時代の大きな功績として，私たち会員の記憶にしっかりと刻まれています。加えてまた，当時文部省の企画による学術用語集の中の「言語学編」の編集作業に私たちが着手したのもちょうどその頃で，平成 9 年に刊行された『学術用語集言語学編』は，小泉会長の熱意と先導的な働きかけがなかったら，おそらくこのような形で結実することがなかったでしょう。言語学用語の選定をめぐって，熱い議論が交わされた当時の用語委員会のことどもが，つい昨日のことのように想い出されます。

日本言語学会でのこうした仕事を離れた後，私事にわたりますが，私はたまたま静岡に第二の職場を得て，1990 年代後半の 5 年間をこの静岡で過ごすこととなり，

これまで以上に先生との親しいお付き合いを続けることができました。そうした中で私が常々敬服してやまない先生のあの温厚な人柄やその包容力の限りない広さと奥深さは，まさしくこの静岡という土地に特有の温かく穏やかな風土によって育まれたものと深く感得した次第です。

先生の包容力の広さと奥深さは，もちろん人柄だけに限ったわけでなく，先生の学問・研究領域にも行き渡っています。ここで先生のこれまでの長い研究活動を振り返ってみますと，若い頃から一貫して取り組んでこられたウラル語学の分野でこれまでに先生が成し遂げられた仕事は，叙事詩『カレワラ』の翻訳，『フィンランド語文法読本』，『ウラル語統語論』等々，その分量と幅の広さにおいて，日本ではほかに比肩するものがないでしょう。こうした見事な業績によって，フィンランド政府からの栄誉ある受章に輝いたことも私たちの記憶に新しいところです。

もとより先生の仕事は，ウラル語研究だけにとどまりません。音韻論や音声学も先生が古くから得意とされた分野で，この方面のすぐれた著述も数多く残され，また日本音声学会の会長も務められました。先生の学問的生涯の後半期に入ってから，先生がとりわけ熱心に取り組まれたのは，語用論と意味論の分野で，『言語学とコミュニケーション』や『ジョークとレトリックの語用論』などの意欲作を世に問われました。加えてまた最近では，現代日本語統語論が先生の中心的な研究対象となってたいたようです。すでに大阪外国語大学時代に手がけられたテニエールの『構造統語論』の大著の翻訳が，先生をこの方面の研究へと向かわせたものかと思われます。先生にとって今や生前最後の仕事となった『日本語の格と文型』そして『現代日本語文典』は，いずれもこの分野の輝かしい成果でしたが，今後そのさらなる発展に私たちも大きな期待を寄せていたのでした。

何とも無念なことに，先生の研究そのものはこうして道半ばで断たれたかに見えます。しかし，先生のこれまでの長い在職中，先生から直接・間接に教えを受けられた大勢の教え子やお弟子さんたちによって，先生の学問はそのまま引き継がれ，今後ますます大きな発展を遂げることを私は信じて疑いません。これまで，先生の還暦，古希，傘寿をそれぞれお祝いして，立派な記念論文集がすでに三度刊行されました。そこには，先生が研究者・教育者としてこれまで積み重ねられたその層の厚みと幅の広さがそのまま映し出されていると言ってよいでしょう。こうしたお弟子さんたちの今後の活躍に大きな期待を寄せながら，今はただ，先生のご冥福を心かお祈りするばかりです。小泉先生，どうぞ安らかにお眠りください。

平成 21 年 12 月 27 日

（日本言語学会顧問）

思い出の記

澤田治美

今，手元に『天知る，地知る，我知る――言葉の道を　幾星霜』（平成 21 年 12 月 27 日）の白い美しいパンフレットがある。平成 21 年 12 月 18 日にご逝去された小泉保先生のご業績を記したものである。このパンフレットから，先生の輝かしい研究活動，教育活動，学会活動の全貌が手に取るようにわかる。

周知の通り，小泉先生は，日本言語学会会長をはじめとして，日本語用論学会会長，ウラル学会会長，日本音声学会会長，中部言語学会会長など数々の学会の会長を歴任され，日本における言語学の発展に多大な貢献をなされた。業績は，言語理論，ウラル語学を中心として，著書 22，論文 169，翻訳 14，その他 39 にも及ぶ膨大な量である。

先生は静岡高校，静岡女子大学，大阪外国語大学，関西外国語大学で教鞭を取られ，多くの俊英を育てられ，同僚，教え子から慕われた（2010 年 1 月 15 日付の『静岡新聞』（朝刊）に，静高時代の教え子である作家三木卓が敬愛の念を込めて「言葉の道を幾星霜，ずっとがんばって」と題する追悼のエッセイを載せ，英語教師「小泉先生」のことを書いている）。以下，個人的なエピソードをまじえて，小泉先生の思い出を記してみたい。

当時関西外国語大学・国際言語学部学部長であられた小泉先生から筆者に，「語用論学会を設立しようと思うのですが，手伝ってくれませんか」というお話があったのは，今から 13 年前の，1997 年 6 月のことだった。小泉先生は『言外の言語学―日本語語用論―』（1990，三省堂）を出版され，日本における語用論の発展の必要性を痛感しておられた時であった。

その後，京都駅近くのレストランで，山梨正明教授（現・日本語用論学会会長）をはじめとする幾人かの有志が参集して，お酒を酌み交わしつつ，語用論学会のイメージや各自の専門分野などを話し合い，談論風発，とても楽しい会になった。あの時の小泉先生の楽しそうな笑顔が今でも浮かんでくる。

記念すべき第 1 回大会は，翌年の 1998 年 12 月 5 日（土），関西外国語大学で開催された。小泉先生のご尽力により，あいにくの小雨にもかかわらず，参加者は 180 人以上にのぼり，語用論に対する関心の高さがうかがえる大会となった。先生は「川柳の語用論」と題して，記念講演をなされた。川柳を語用論の観点から分析するという独創的なもので，聴衆はみな深い感銘を受けた。

その後，小泉先生には 8 年間会長を務めていただいた。小泉先生は「大人（たいじん）」だった。皆，先生とお酒を飲みながら学問や人生の話をするのが大好きだった。日本語用論学会の『設立趣意書』の中で，先生は「発話の意味は，その発話の場面を考慮に入れない限り，解釈不可能になるケースが数多くあります。いや，発話をその状況において意味分析してこそ「生きたことば」の実相を明らかにすることができるので

す。」と述べておられる。私たちは小泉先生から「人生の学としての言語学」を学ぶことができた。

2001 年に中国語用論学会から招待されて，中国の蘇州大学で開かれた第 7 回中国語用論シンポジウムに参加したことも忘れがたい。小泉先生，余維先生，私とで 8 月 6 日から 10 日まで蘇州に滞在した。先生は「ジョークの語用論」と題して基調講演をされ，中国の学者たちに大きな感銘を与えられた。先生のお人柄と学問が中国の語用論学会の何自然会長の心を捉え，何会長は 2007 年に関西外国語大学で開かれた日本語用論学会 10 周年記念大会で基調講演をしてくださった。これも先生のおかげである。

関西外国語大学に在職しておられた頃，先生は，毎週火曜日と水曜日，夕方 7 時半ごろまで院生と読書会をなさっていた。終わると，たいてい大学の近くの「菊竹」という食堂にお寄りになった。そこでよく夕食をご一緒し，熱燗に湯豆腐で，学問の話をした。「これぞという本を徹底的に読んで自家薬籠中のものにして，その理論を日本語に応用するのがいいですね」とおっしゃったことは未だに心に残っている。今から思うと，「これぞという書物」とは，テニエール，・レビンソン，ラネカーなどの名著を指すのであろう。

京都から静岡に帰る新幹線の車内で，先生からたくさんお話をうかがうことができた。縄文語，テニエールの結合価理論，意味論，統語論，語用論，日本語の歴史，モダリティ，神話，ウラル語，フィンランド語，叙事詩「カレワラ」，日本の方言など。先生からは，どんな話題を出しても必ず当意即妙の答えが返ってきた。雑談から，先生がたんなる書斎言語学の学者ではなく，野外調査の学者であることもよくわかった。夢中になって語り合っていると，あっという間に静岡駅に着いた。

先生の豊かな学識とお人柄はどのようにして完成したのであろうか。ふみ夫人をはじめとするご家族の励ましや支え，先生の天賦の才能によるところが大きいとは思うが，私には，それに加えて，「たゆまぬ努力」によるものではなかったかと思えてならない。先生から教わったことは，たゆまぬ努力の大切さである。たゆまぬ努力が「他人にやさしく，自分に厳しく」という先生の生き方を作ったに違いない。

今年の 3 月 12 日，ご自宅に伺った折，ふみ夫人から，小泉先生が絵がお好きで絵画教室に通っておられたことをお聞きした。「小泉言語学」には学識，空想力，とらわれない自由な精神が溢れているが，その理由の一端を垣間見た思いであった。私の人生の中で小泉保先生と出会えたことは一生の宝である。先生にはいくら感謝をしても感謝し足りない。心からご冥福をお祈りしつつ，この記を終えることにする。

（関西外国語大学教授／前日本語用論学会会長）

小泉保先生の思い出

上田　功

年があらたまって，1980 年の学年末，授業期間の最終週のことであった。大阪外国語大学は，その前年に大阪市内から郊外の箕面市に移転を終えていたが，新しい環境に，皆何かと落ち着かぬ状態であった。当時，学部の 2 年生であった私は，ある言語学の授業に出席していた。最終授業の終わりに，担当の助教授が受講生に，移転の為に学年暦が変則であった一年間の労をねぎらわれ，そして「来年度から，国立大学では初のフィンランド語の授業が開講されるので，興味のある人はぜひ出席してみて下さい。」と言われた。先輩の話によると，小泉保先生が転任してこられるという。先生のお名前は，月刊『言語』やシュービゲルの音声学入門書の翻訳で存じ上げていたが，まだウラル語がご専門であることも知らなかった。4 月になって先生が着任され，授業も始まり，先生は学部向けには 3 科目の授業を担当された。私は「フィンランド語」と「構造言語学」に出てみることにした。「フィンランド語」は小さな演習室で 10 人足らずの受講生であった。反対に「構造言語学」は大教室で，受講生は 200 名近くいたと思う。このように極端に異なる 2 つのクラスであったが，先生はおだやかな声で，語りかけるように授業をされた。これが私の小泉先生との出会いであるが，この時先生は 55 歳になっておられた。もう一つのご担当科目は，大学院と共通の「言語学演習」であった。私は先生のご専門は音声・音韻と思い込んでいたが，すでにご興味の対象は意味論・語用論に移っており，Lyons の Semantics の 2 巻本から，Mood，Modality，そして Tense，Aspect などに関係する章を選んで講読された。この授業も 200 人もの学生がつめかけ，到底「演習」にはならなかったので，先生は院生や言語学を専門にしようとする学生を気の毒に思われて，別に少人数で演習の時間を夕方に設けて下さり，私にも参加するよう勧めて頂いたので，末席に加わることになった。これが研究会的な存在となり，先生がご退職されるまで続く。翌年私は留学し，帰国後大学院に進学するが，修了するまで，この演習にはずっと参加した。この時間には，Chomsky の *LGB* や Tesnière の *Éléments de Syntaxe Structurale* などを読みながら，広く関連する問題を議論した。この演習は，先生にとっても意義深い時間だったらしく，後に「実に楽しく，有意義であった」と回想されている。先生はというと，ご自分のご意見を強く主張したり，他人の意見に強く反駁したりされることはほとんどなく，様々な言語理論をかみしめ，咀嚼するように，丁寧に文献を読まれていた。先生が次のように言われたのをよく覚えている：

「理論がないとだめだよ。ただし言語事実も尊重しないとだめだ。」

先生は，学生の荒唐無稽ともいえる考えにも，じっくりと耳を傾けて下さった。学

生の研究に関しても，自主性を尊重された。この時期に共に学んだなかには，日本語学の野田尚史，生成文法の藤田耕司，カタルーニャ学の田澤耕，語用論の山本英一（敬称略，以下同様）など，自分の興味を持った道をまっすぐに進み，現在最前線で活躍している者が多い。

小泉先生はその後関西言語学会の会長に就任された。大学院修了後，私は大阪の私立大学の助手になっていたが，2 年ほど事務局を手伝わせていただいた。生粋の静岡人である先生は，大阪人の気質に馴染むのが難しいと言われたことがある。かつて府中とよばれ，東海道の大きな宿場町であった静岡市では，店に入るとすぐに，店員がもみ手をしながら声をかけてくるということはほとんどないので，商人の街大阪の習わしや文化には戸惑われたこともあったようだ。しかしながら学問的な風土は非常に気に入られたようで，特にどんな研究分野でも，各大学の枠にとらわれず，やりたい者がいればすぐに受け入れて，共に切磋琢磨していく土壌がすばらしいと，常に賞賛されていた。そして外から来た自分を，多くの優秀な若い先生方が支えてくれたことを心から感謝していると回想されている。結局関西言語学会の会長は，事務局の三原健一さんと二人三脚で，数年間続けられ，その後日本言語学会等の会長を歴任されることになる。元来学会の役員はボランティアで，気疲れすることも多く，敬遠されることが多いが，先生は常に：

「我々は学会に育ててもらうんだよ。だから学会に恩返しをしないとだめだ。」

このように言われた。これは私も，できるかぎり実践するようにしている。

その後私は，静岡に転任することになるが，小泉先生の地元に移るとはご縁が深かったということであろう。先生は地元静岡でも，言語学研究者を集めて，中部言語学会という名で，年 2 回の研究会を主導しておられた。研究者人口が少ないので，細々とやっていると言われたが，メンバーには，本田畠冶，澤田治美，坪本篤郎，田端敏幸，高見健一，寺尾聡，近藤真など，各分野で活躍している人材を擁していた。ある時先生が，せっかく長く続いている会なので，何とか機関誌をもてないかと発議され，それは良いと皆賛成はしたものの，先立つものがなく，執筆者の負担にすると，とても払いきれない額になるので，話は行き詰まってしまっていたところ，先生は執筆者の負担は最小にして，残りの相当の金額をご自身でお支払いになった。これには一同感謝の他はなく，先生が育ててこられた研究の場に対する愛情に感じ入った次第である。機関誌のタイトルは *Ars Linguistica* となったが，これは小泉先生の命名によるものである。*Ars Linguistica* は順調に刊行を続け，2009 年度には 16 号を数えている。

私の静岡での在職は約 5 年であったが，その間には，研究から離れた先生の姿を見ることができた。先生は絵画がお好きで，世界各地を旅行される際，滞在先の美術館や博物館を必ず訪ねられるとうかがっていたが，ご自身でも絵をお描きになる

ことを初めて知った。私が静岡で家を買った時に，お祝いにといただいたのが，ご自身の手になる裸婦の本格的な絵だったので驚いた。雅号もお持ちで，「南天亭」であったと記憶している。また静岡は自然薯が有名で，弥次喜多道中記にも「鞠子のとろろ汁」として登場するが，これは小泉先生の一番の好物であった。静岡に集中講義などで来られた先生方で，小泉先生に連れられ，とろろ汁を食べた方は多い。私は一度ご自宅に呼んでいただき，良い自然薯の見分け方，保存の方法等を教えて頂き，そしておろし金を使って芋をおろし，味噌のだし汁を加えながらすり鉢で伸ばしていくのを，手を取りながら教えていただいたことがある。先生は本当においしそうにとろろ汁を召し上がった。先生は病気らしい病気をされたことがなかったが，お元気の源のひとつは，とろろ汁であったにちがいない。

私はその後大阪に戻ることになり，先生とお会いする回数は減るが，学会の連絡等で，電話でお話する機会があると，私の書いた論文などを読んで下さっていて，さりげなくコメントをいただいた。よく先生は言われた：

「発表や論文は，たとえ批判されても，世に問うた者の方が偉いんだよ。」

先生ご自身は，この頃から，それ以前にも増して，執筆に力を注がれるようになった。毎年のように，一冊また一冊とご著書を恵送していただく度に，先生の学問に対する情熱に驚かされるとともに，自分も頑張らねばという気持ちになったものである。先生は音声学・音韻論からスタートし，意味論・語用論へと進まれ，最後に統語論に着手された。若いご時分に，ウラル語を変形文法で分析された論考もあり，1994年にはウラル語の比較統語論の著書により学位も取得しておられるが，晩年情熱を傾けられたのは，テニエールの結合価理論であった。テニエールといえば，前述したように，大学院時代に授業で読み合わせをして，そして是非翻訳して出版しようということになったのだが，原著は大部なものであったので，前半部だけを出版しようということになり，358ページを分担で翻訳したものが，20年以上そのままになって，先生の手元に残っていた。先生はこの完成になみなみならぬ熱意を持ち続けておられたが，諸学会の会長のみならず，大阪外大を退職後に勤められた関西外大では，理事や学部長などの重職を歴任されておられたので，時間がこれを許さなかった。しかし関西外大を退職されると，先生は翻訳の完成に取り組まれ，当初は前半だけを出版するはずが，何と後半316ページをご自分であっという間に翻訳され，懸案だった翻訳は2007年に研究社から『構造統語論要説』として出版することができた。2008年春に，翻訳を分担した者4名が京都に集まり，先生と翻訳の完成を祝ったが，20年越しの仕事の完成に，安堵の気持ちと同時に，原著へのこだわりを話されていたことを思い出す。先生はその後，古くからの国文法に基づく活用体系の問題点を指摘し，現代言語学による「語形変化表」に置き換えた新しい文法論を，『日本語の格と文型』（2007）と『現代日本語文典』（2008）で提案され

ているが，これらの著書でも，統語分析には結合価理論を用いられている。後者において先生は，「これまでの研究で蓄積された知識のすべてを投入し，」日本語の音声，音韻，形態，統語，意味，語用を記述され，「本書が 21 世紀の日本語文法の叩き台として，諸氏のご理解とご批判をいただくことを願っている」と，序文を結んでおられる。

2009 年 12 月末に先生の訃報に接した。その年の夏に体調を崩され，しばらく入院されたとうかがい，8 月末，退院後のご自宅にお見舞いにうかがった時には，以前のようにお元気なっておられ，その後も以前と変わらぬ状態にまで回復されたとうかがっていただけに，まったく予期せぬ，突然のことであった。しばらくは本当に亡くなられたのか，信じられない状態が続いたが，徐々に時が経つと，大きな喪失感を実感するようになった。先生は日本言語学会のみならず，日本音声学会，日本語用論学会，ウラル学会，関西言語学会，中部言語学会等の会長を務められ，さまざまな領域で，さまざまな形で，そしてさまざまな場所で，日本の言語研究に貢献してこられた。また先生はご自分を全科を診察する老医にたとえられていたが，音声から語用までの言語学の主要分野だけではなく，文字論や言語地理学，日本語の系統に至るまで，言語のほぼすべての領域を見渡すことができ，そして神話学を深く研究され，『カレワラ』を達意の訳文で翻訳された博言学者であった。そしてご専門のウラル語研究では，本家フィンランドやハンガリーの研究者も及ばない領域に達しておられたと聞く。まさに巨木が失われた感がある。先生は休刊が決まった月刊『言語』の最後の号で，ご自身のエストニア語の習得の体験を書かれ，若い研究者に，新しい語学に挑戦することを勧められたが，ご自分もウラル諸語だけではなく，仏独露語を良く操られ，特にドイツ語の運用能力は卓越していた。このように見てくると，小泉先生の研究に対する衰えることの無い情熱は，ことばそのものに対する深い愛情と表裏一体であったのだろう。

ふとした時に，小泉先生を思い出すことがある。最初大阪外大の演習室でお会いした時のこと，学会終了後よく居酒屋で皆と飲んだ時のこと，ご自宅で自然薯を擦りおろしておられる時のこと，そして最後にお見舞いにうかがった時のこと，さまざまな情景が思い出されるが，その中で私の脳裏に浮かんでくる先生は，すべて同じお姿である。柔らかな微笑みを口元にたたえながら，こちらの話に耳を傾けられ，大きく頷きながら，「ほう，そうかね。」と，おだやかに優しい声でお話になるお姿である。気がつけば自分は小泉先生に最初にお会いした年齢になっており，自分がいかに未熟かが身にしみてきている。そんな私に向かって，先生はいつものように：

「根気強く机に向かうことだよ。コツコツと長く続けていたら，いいこともあるよ。」

と語りかけて下さっていることであろう。

（大阪大学大学院言語文化研究科教授）

小泉保先生主要著作目録

野田尚史　作成

【著　書】

1971年 9月 『音韻論 1』（英語学大系 第 1 巻）［牧野勤との共著］，大修館書店.
1971年10月 『新英文法』［小野達との共著］，松柏社.
1977年 6月 『新言語学から英語教育へ』［佐々木昭との共編］，大修館書店.
1978年 5月 『日本語の正書法』（日本語叢書），大修館書店.
1983年10月 『フィンランド語文法読本』大学書林.
1984年 4月 『教養のための言語学コース』大修館書店.
1990年 3月 『言外の言語学―日本語語用論―』三省堂.
1991年 3月 『ウラル語のはなし』大学書林.
1993年 1月 『音声』（分野別日本語教育能力検定試験対策集中講義 3），アルク.
1993年 1月 『ラップ語入門』大学書林.
1993年 7月 『日本語教師のための言語学入門』大修館書店.
1994年 8月 『ウラル語統語論』大学書林.
1995年 6月 『言語学とコミュニケーション』大学書林.
1996年 9月 『音声学入門』大学書林.
1997年 5月 『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店.
1998年 6月 『縄文語の発見』青土社.
1999年 3月 『カレワラ神話と日本神話』（NHK ブックス 855），日本放送出版協会.
2000年 1月 『言語研究における機能主義―誌上討論会―』［編著］，くろしお出版.
2001年10月 『入門　語用論研究―理論と応用―』［編著］，研究社.
2003年 4月 『改訂　音声学入門』大学書林.
2007年 2月 『日本語の格と文型―結合価理論にもとづく新提案―』大修館書店.
2008年 8月 『現代日本語文典―21 世紀の文法―』大学書林.
2008年11月 『カレワラ物語―フィンランドの神々―』（岩波少年文庫 587），岩波書店.
2009年10月 『エストニア語入門』大学書林.
2009年11月 『日英対照　すべての英文構造が分かる本』開拓社.

【論　文】

1959年 3月 Die Typen der finnisch-ugrischen Vokalharmonie.『言語研究』35，日本言語学会.
1963年 3月 Some Problems of Vowel Systems.『音声の研究』10，日本音声学会.
1963年 4月 「日本語と英語の数詞の形態的構造」，小泉保（他）『日英両語の比較研究』（英語教育シリーズ 別冊），大修館書店.
1967年 2月 「形態素と形態音素的操作」『言語研究』50，日本言語学会.
1971年12月 A Study of Finno-Ugric Passive Voice.『言語研究』60，日本言語学会.
1972年 3月 「語形変化の体系」，服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会（編）『現代言語学』三省堂.
1976年 3月 「ハムレットとカレワラ」『文学』44(3)，岩波書店.
1976年 7月 Finno-Permic Negative Verbs. *Uralica* 3. ウラル学会.
1979年 5月 「言語理論―日本語の構造」［中島平三，外池滋生との共著］，今井邦彦（編）『言語障害と言語理論』（シリーズことばの障害 1），大修館書店.

1979年 6月 「言語理論の英語教育への応用」，三宅鴻（他）『英語教育と関連科学』（現代の英語教育 2），研究社出版.
1980年 3月 Some Patterns of Vowel Changes—With Reference to Estonian—.『言語研究』77，日本言語学会.
1980年 6月 「形態論的比較」，國廣哲彌（編）『日英語比較講座 第 1 巻 音声と形態』大修館書店.
1980年 7月 「音韻の構造」，柴田武（編）『講座言語 第 1 巻 言語の構造』大修館書店.
1981年 2月 「フィン・ウゴル語における母音調和の規則」『音声の研究』19，日本音声学会.
1981年 7月 「言語をめぐる諸問題」，北村甫（編）『講座言語 第 6 巻 世界の言語』大修館書店.
1984年 9月 「外国語の敬語」，鈴木一彦・林巨樹（編）『研究資料日本文法9　敬語法編』明治書院.
1986年12月 Narrative Moods in Finno-Ugric. *Uralica* 7. ウラル学会.
1987年 3月 「譲歩文について」『言語研究』91，日本言語学会.
1987年 6月 「日本語系統論の足跡」『言語』16(7)（創刊 15 周年記念別冊），大修館書店.
1988年 4月 「プラーグ学派」「対照言語学」，林栄一・小泉保（編）『言語学の潮流』勁草書房.
1988年11月 「空間と時間における直示の体系」『言語研究』94，日本言語学会.
1989年 5月 「音声と音韻」，杉藤美代子（編）『講座日本語と日本語教育　第 2 巻　日本語の音声・音韻（上）』明治書院.
1991年 7月 「現代日本語の音韻と正書法」『日本語学』10(7)，明治書院.
1991年 7月 「文字・表記の歴史」，辻村敏樹（編）『講座日本語と日本語教育 第 10 巻 日本語の歴史』明治書院.
1996年 2月 「皮肉の語用論」，上田功（他）（編）『言語探求の領域—小泉保博士古稀記念論文集—』大学書林.
1998年11月 「撥音「ン」の鼻母音的異音に対して」，平山輝男博士米寿記念会（編）『日本語研究諸領域の視点（下）』明治書院.
1999年12月 「川柳の語用論」『語用論研究』1，日本語用論学会.
2003年 3月 Formation of objective conjugations in Mordvin. *Uralica* 13. ウラル学会.
2003年 5月 「上代日本語の東と西—上古における否定辞ヌとナフの分布—」，中西進（編）『万葉古代学—万葉びとは何を思い，どう生きたか—』大和書房.

ほか全 169 点

【翻　訳】

1962年　12月 イトゥコネン『フィン＝ウゴル祖語の音韻と形態の構造』北欧出版社.
1973年　3月 M. シュービゲル『音声学入門』大修館書店.
1976年8, 10月 リョンロット（編）『フィンランド叙事詩　カレワラ（上）（下）』（岩波文庫　赤-32-745-1,2），岩波書店.
2007年　3月 ルシアン・テニエール『構造統語論要説』［監訳］研究社.

ほか全 14 点

【その他】

1989年 3月 『日本語基本動詞用法辞典』［船城道雄，本田畠治，仁田義雄，塚本秀樹との共編］，大修館書店.
1990年 3月 ［書評・紹介］Denis Sinor (ed.) *The Uralic Languages, Description, History and Influences*.『言語研究』97，日本言語学会.

ほか全 39 点